

厚労省「がん対策の推進に関する意見交換会」

がん医療の課題

～患者・記者の視点から～

2006年11月20日

読売新聞社会保障部

記者 本田 麻由美

「その日から 生き地獄でした」

● 忘れられないTさん(70歳代)からの手紙

- 妻が不調訴え診療所へ、3か月後に別の病院で膵がん告知
- 5か月後、「もう治療法はない」「退院して」と言われ、仕方なく家へ
- 「相談する術もないまま、私の腕の中で苦しみ、胃液を出しながら息を引き取った妻・・・」

「疑問だらけのがん医療、医者の説明の仕方、対応に不満爆発」

がんと私

※34
本田 麻由美記者

「もう治療法はありません。これは、がん患者として最も言われたくない言葉だ。」
「がん」は、診断がついた時から入死と隣り合わせの病気だ。過去の治療成績などのデータから生存率を推測できても、「自分がどれくらい生きられるか」は、誰にも分からない。「治らないとしても、がんと共に生きながら生きられるかもしれない」と、医学の進歩を信じ、希望をこぼす。そんな患者・家族にとって、「治療法はない」といふ言葉は、受け入れ難いものはない。

「末期で、もう治療はできない」と言われた△△さんと家族

「治療法はない」と言われても……

の苦悩を、本欄(4月18日)で紹介したところ、大きな反響があった。医師の無神経な言知への怒りのほか、「『治療法はない』とは、どいふ状態なのか」「それ言われたらどうすればいいのか」「そもそも、末期がんをどう治療するべきな

るか」肺がんの父親に、医師は「後にはイレッサしかないが、厳しい副作用がある。治療しないなら退院を」と迫った。Fさんは、「病院側の言い分だけでは、本当に治療法がないのかどうか見極められない。切り捨てられた患者は、どう入行けばいいのか」

「ホスピスを紹介する」と、顔も見ずに治療を拒否された。現在、別の病院で抗がん剤治療を受けながら自宅で生活しているだけに、その時の対応に強い憤りを感じているという。

一方、大学病院勤務の20歳代の看護士は、最後まで抗がん剤

の「なご」について、様々な意見や体験談が寄せられた。「『もう治療法はない』と言われても、その病院の問題なのか、国際的な医療水準から本当にないのかわからない」と、大阪市の会社員Fさん(46)は訴え

と不信感をこぼす。千葉県の宮本一郎さん(74)は胃がんが肝臓に転移して、昨年2月、「余命半年」と宣告された。その際、医師に「抗がん剤治療は苦しいだけで、お金もかかる。無駄だからしない方がいい

などの積極的な治療をすること、疑問があるという。「余命が延びることもあるが、強い副作用に苦しむことが多く、QOL(生活の質)が向上するケースは稀のように感じる。一概にホスピス行きを否定するのもおかしいのでは」と悩みを語る。